



II. 教育・授業改善、FD

1. 高等教育研究開発推進センターウェブサイトリニューアル

2017年7月、本センターのウェブサイトをリニューアルしました。従来の日本語サイトの刷新に加え、英語サイトも充実させました。今回のサイトでは、教員の抱える悩みや教育改善の工夫などを集約し、より双方向的なものにしたいと考えています。そのため、①必要な人に必要な情報を届けるための情報設計、②発信した情報を元に、教員との交流を促しPDCAを回す仕組みを構築することを目指してきました。



日本語版 <https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/> 英語版は末尾に/en/

ある時は、教員とお茶を飲みながらオリジナルの教育手法について談笑し、
ある時は、新任教員セミナーで名物教員のインタビューを紹介し、
ある時は、自身の記事掲載を若手教員に伝えているベテラン教員の姿を目撃し、
ある時は、フォーラムで他大学の教員からサイトについての話題が聞こえる。
そんな風景が浮かぶための中心となるサイトをイメージしました。

例えば、京都大学の先生方の疑問に答える「教育上の問題解決」のページを設けたり、特色ある取組(カリキュラムや授業など)を「教員インタビュー」によって可視化したり、できるだけ実践に役立つ情報を提供していきたいと考えています。まだまだコンテンツも少なく、その実現には時間がかかりますが、少しずつ育てていきたいと思えます。ぜひ、当ウェブサイトを訪ねいただき、ご質問やご要望、情報提供などいただけると幸いです。

(山田 剛史)



教育上の問題解決のページ



教員インタビューのページ

2. 全学教育シンポジウム

本シンポジウムは、1996年から年1回開催されており、京都大学の教職員が全学的な教育のあり方や、教育の改善・充実の方向性について議論し、部局の枠を越えた教職員の交流を図る場になっています。近年は教育担当理事が主催し、2016年度からFD研究検討委員会の企画により、本センターが実施・運営を行っています。

昨今、大学の社会的なミッションや役割が問われていますが、京都大学は、2017年6月に指定国立大学法人の指定を受け、教育力と研究力の一層の強化が進められています。そうした状況の中で、21回目にあたる今回のシンポジウムでは、「社会とつながる京都大学の教育」をテーマに設定し、多様な観点からこのテーマについて考えることにしました。

9月8日に桂キャンパス・船井哲良記念講堂で開催され、参加者は223名でした。

(1) プログラム

午前の部では、京都大学を取り巻く教育改革の現状や方向性に関する北野正雄教育担当理事・副学長の基調講演に続いて、本学の人文・社会科学分野の5専門教育部局長（現・前）にご登壇いただき、人文・社会科学系の教育の現状と今後の課題について、ご報告いただきました。これは、先に実施された「養成する人材像と教育課程を明確化するための検証プロジェクト」（『人を見つめるちから×社会を動かすちから—京都大学人文・社会科学の教育—』2017年3月）から得られた知見の共有をめざすものです。

午後の部では、社会の中における京都大学のありかたについて俯瞰し展望する山極壽一総長の基調講演に始まり、社会とつながる京都大学の教育的取組として高大連携や地域連携等に関する実践や活動についての4つの報告を共有した後、京都大学の教育の強みをどう見極め、育み、社会に発信していくかについて、執行部から5名の方にご登壇いただき、パネルディスカッションを行いました。クリッカーを使いながら、会場からのレスポンスをふまえて活発な意見交換がなされました。



テーマ1：パネリスト・モデレーター



テーマ2：パネルディスカッションの様子

(2)参加者の声

参加された先生方のご感想・ご意見をうかがうために、アンケート調査を実施しました(有効回答数116件、回収率52.0%)。興味深かったプログラムとしてはテーマ2の「社会とつながる京都大学の教育: 高大連携・地域連携(報告・質疑応答)」(48.3%)が最も多く挙げられ、テーマ1「京都大学の教育の今とこれから: 人文・社会科学系からの提言(パネルディスカッション)」(42.2%)、テーマ3「京都大学の教育の強みをどう見極め、育み、社会に発信していくか(パネルディスカッション)」(39.7%)と続きました。「普段知らなかった高大連携等の話がお聞きできて良かった」「各登壇者を通して京都大学の教育に対する考え方がわかったのもとても有益だった」といった感想もあり、プログラム自体は概ね好ましく評価されていました。

また、小規模な勉強会・ワークショップに参加したいと思うテーマでは、世界の研究大学の教育改革(38.8%)、中退者・成績不振者への対応(25.9%)、英語による授業(24.1%)、ICTの教育的利用(20.7%)などが多く挙げられており、シンポジウムで扱ったテーマへの関心の高まりも感じられました。感想の中には報告内容についてのクリティカルなコメントや、まだ取組が不十分なのではという意見も寄せられました。これらの結果から、それぞれの参加者が京都大学の教育改革の方向性について、また京都大学の存在感をどのように高めてそれをどう発信していくかなどについて振り返り、ともに議論する機会を提供できたのではないかと考えられます。

※アンケートの回答については複数回答可であったため、合計は必ずしも100%にはなりません。

当日の詳細な報告書は下記からご覧になれます。

- 全学教育シンポジウム: <http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/symposium.php>

(松下 佳代・齋藤 有吾)



テーマ2: 報告者



テーマ3: パネルディスカッションの様子



テーマ3: パネリスト・モデレーター

全学教育シンポジウム プログラム

司会進行：山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授

【午前の部】	
10:00～	開会挨拶・基調講演 1:「京都大学が直面する課題と教育改革の方向性」 北野 正雄 教育担当理事・副学長
10:30～	テーマ1:パネルディスカッション 「京都大学の教育の今とこれから:人文・社会科学系からの提言」
10:35～	《モデレーター》飯吉 透 理事補(教育担当)・高等教育研究開発推進センター長 《パネリスト》 北野 正雄 教育担当理事・副学長 川添 信介 学生担当理事・副学長 平田 昌司 文学研究科長 高見 茂 前教育学研究科長 潮見 佳男 前法学研究科長 文 世一 経済学研究科長 杉山 雅人 人間・環境学研究科長
12:30～	(昼食・休憩)
【午後の部】	
13:40～	基調講演 2:「京都大学の教育体制を世界の大学のデータから展望する」 山極 壽一 総長
14:00～	テーマ2:パネルディスカッション 「社会とつながる京都大学の教育:高大連携・地域連携」
14:05～	《テーマの説明》松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授 《報告・質疑応答》 高大連携(ELCAS):村上 章 副ユニット長、農学研究科副研究科長・教授 高大連携(京大オープン教材):田口 真奈 高等教育研究開発推進センター准教授 地域連携(教育問題解決の支援):桑原 知子 理事補(広報担当)・教育実践コラボレーションセンター長・教育学研究科教授 地域連携(サービス・ラーニング):佐山 敬洋 防災研究所准教授
15:35～	(休憩)
14:00～	テーマ3:パネルディスカッション 「京都大学の教育の強みをどう見極め、育み、社会に発信していくか」
	《モデレーター》飯吉 透 理事補(教育担当)・高等教育研究開発推進センター長 《パネリスト》 山極 壽一 総長 北野 正雄 教育担当理事・副学長 川添 信介 学生担当理事・副学長 木南 敦 理事補(教育担当)・法学研究科教授 東島 清 監事
16:55～	閉会挨拶
17:00	終了
17:15～	情報交換会 カフェ「Arte」



3. 新任教員教育セミナー

9月6日、京都大学百周年時計台記念館にて、「京都大学新任教員教育セミナー2017」を開催しました。本セミナーは、2017年度が第8回目となり、京都大学に採用された新任教員および助教から昇任された教員を対象に実施しています。

京都大学らしい教育の在り方について考えたり、学内に存在する様々な教育支援について知っていただいたり、実際に直面している教育に関する問題や学生指導上に関わる課題などについて共有したりする場所になるようプログラムを作っています。

(1) プログラム

プログラムは表1の通りです。全学、部局、個々の教員という異なるレベルでの教育的取組を、ミニ講義や討論などを通じて理解してもらうことを意図して設計されています。

表1 2017年度 京都大学新任教員教育セミナープログラム	
13:00～	開会式 (司会: 高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史) 趣旨説明 高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史
13:05～	セッション1 オープニングレクチャー 「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」 理事・副学長(教育・情報・評価担当) 北野 正雄
13:30～	セッション2 ミニ講義 「埋め込み型研究公正教育のすすめ」 文学研究科准教授 伊勢田 哲治
13:55～	セッション3 私の授業 「薬学専門科目での反転授業とグループ学習の試み2017」 薬学研究科教授 金子 周司
14:20～	セッション4 京大の教育・学習支援 高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史/田口 真奈
14:30～	休憩
14:50～	セッション5 グループ別セッション(参加型セッション)(詳細は表2参照) 休憩
16:30～	セッション6 インテグレーションセッション
16:50～	閉会式
17:30～	閉会挨拶 FD研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長 飯吉 透

全体会では、まずセッション1として、北野正雄教育担当理事より「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」と題したオープニングレクチャーがありました。大学を取り巻くマクロな状況を踏まえつつ、京都大学が取り組んでいる様々な教育改革について紹介がありました。特に、昨今話題になっている高大接続に関する取組について、新たに始まった特色入試も交えながら紹介されました。

セッション2では、伊勢田哲治文学研究科准教授より「埋め込み型研究公正教育のすすめ」と題したミニ講義がありました。高等教育機関全体にとって喫緊の対応課題となっている研究公正について、教育(授業)に埋め込む形で学生への研究公正を行うという先進的な取組が紹介されました。

セッション3は、自身の授業実践を紹介する「私の授業」でした。今回は、金子周司薬学研究科教授より「薬学専門科目での反転授業とグループ学習の試み2017」と題した授業実践の紹介がありました。京都大学が有する授業サポートツールである「PandA」を活用し、授業デザインから実際の成績データとの関連まで含めて紹介されました。

セッション4では、本センターの山田剛史准教授、田口真奈准教授から「京大の教育・学習支援」について紹介がありました。実際には冊子にまとめた『教育サポートリソース』、最近全面リニューアルした「センターウェブサイト」、新たに製作されたポータルサイト「CONNECT」について配布・提示しました。

その後、セッション5は、参加型セッションとして、用意した5つのテーマごとに部屋に分かれてのワークショップがありました(表2)。最後のセッション6は、再度全体で集まってジグソー形式によるインテグレーションセッションを行いました。

テーマ	担当講師	主な内容	ファシリテーター (センター担当者)
「英語による授業」を担当することになったら	情報環境機構長/ 国際高等教育院教授 喜多 一	英語による授業を急に担当することになったとしたら困惑する教員も多いのではないだろうか。ここでは、そのような事態になった場合に、どのように考え、何から準備すればよいのかについて、参加者の先生方と一緒に考えたいと思います。	Nikan研究員 河野研究員
科学を「伝える」授業から、科学が「伝わる」授業へと転換するには	滋賀大学教育学部准教授 (元京都大学iCeMS特任准教授) 加納 圭	以下のような方々に、「科学的知識」(専門用語など「科学の知識」だけでなく、科学の営みといった「科学についての知識」の両方を含む)が「伝わる」授業のコツをお伝えします。 ●授業では最大限伝えているのに、伝わっているという手応えがいまいち得られていない。 ●黒板やホワイトボードやパワーポイントを用いた一方方向の授業から、より双方方向性の高いアクティブラーニングへと徐々にシフトしていきたい。 ●科学コミュニケーションに興味がある/あった。 一方方向の授業=伝える授業、アクティブラーニング=伝わる授業、という図式で捉えず、一方方向の授業でも「伝わる」授業は可能だという前提で進めていきます。	岡本特定助教
困難を抱えた学生に向き合うには	学生総合支援センター カウンセリングルーム准教授 中川 純子	修学上、研究指導上の不適応を起こした学生・院生に対し、教員はどう向き合えばよいのでしょうか。学生のその後の人生を大きく左右する時期に関わっていることを意識し、可能な対応を探るにはどうすればよいのでしょうか。今回は様々な不適応の様相の紹介と「困難」を知る、あるいは気づくための話の聞き方を体験・実習したいと思います。	斎藤特定助教
講義科目でおこなうアクティブラーニング型授業	高等教育研究開発推進センター 教授 溝上 慎一	50-150人規模の講義科目でどのように学生に授業に参加させるか、アクティブラーニング(講義で聴くだけでなく、書く、話す、発表するなどのアウトプットの学習活動を入れるか)を、理論的、実践事例を交えてセミナーをおこないます。後期からすぐ導入できるやり方・技法をお伝えします。アクティブラーニングについてまったく初めての方から、少しやったことあるが、この機会にしっかり学びたいという方まで参加可能です。	河合研究員
ICTを使って、普段の授業をもっと楽しく、ちょっと楽に	高等教育研究開発推進センター 准教授 田口 真奈/酒井 博之	インターネット上の教育リソースや既存のICTツールをうまく使うことで、授業準備が楽になったり、教育効果をあげたりすることができます。ここでは、学内のICT活用実践事例や、簡単に使える様々なリソースを紹介します。ICTを使うのはちょっとめんどくさい、と思っておられる先生にとっては、最初のハードルが下がるような、もっと使ってみたい、と思っておられる先生にはその可能性を感じていただけるようなセッションにしたいと思います。	安宅特定研究員



(2) 参加者

本セミナーは、教育目的に限定して設計されているため、受講対象となる新任教員を、「平成28年度の本セミナー実施以降、本学に採用されて、正規科目を担当している者」と定義した上で、教育推進・学生支援部教務企画課経由で、各部局に対して参加者依頼通知を行いました。当日の参加者は69名(教授7名、准教授18名、助教29名、講師14名、助手1名)でした。

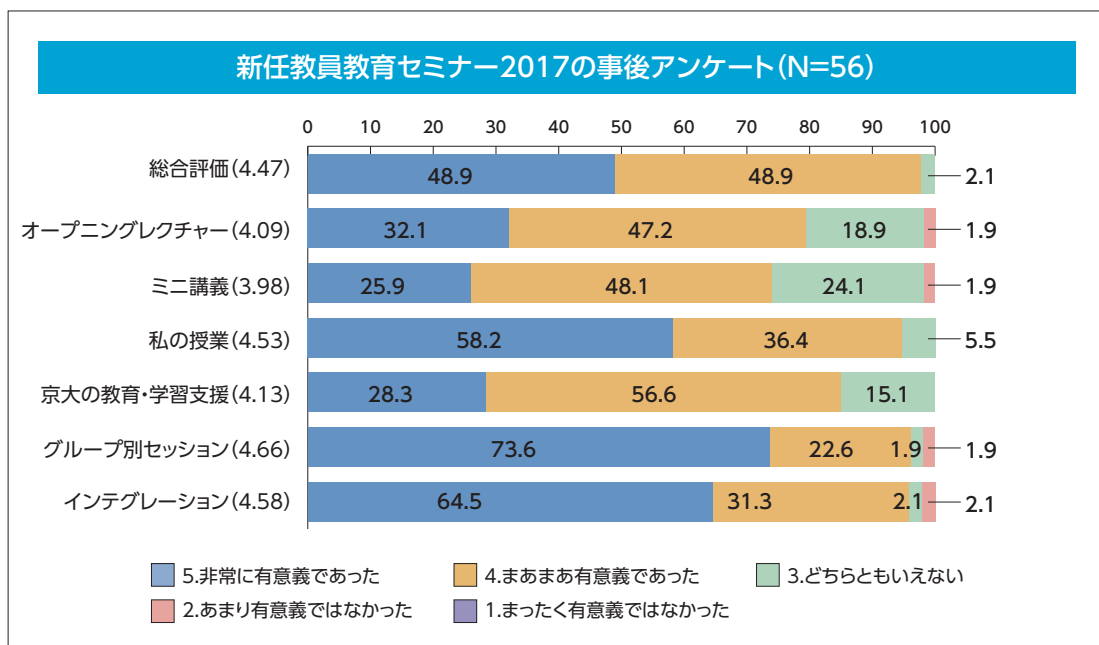
(3) 参加者からの評価

セミナー参加者に対して、セミナーに対する意見・感想を問う

事後アンケートを行いました。その結果、56名(全体の81.2%)から回答が得られました。

① プログラムの有意義度

プログラム全体の有意義度は、5段階で4.47(有意義と回答した割合は97.8%)と高い値が得られました(下図参照)。個々のセッションでみると、グループ別セッションが最も高く(4.66)、次いで2016年度から導入したインテグレーションセッション(4.58)、私の授業(4.53)となっていました。



②プログラム全体で追加すると良いと思われるもの

学内外の動向や教育支援の具体的な内容などのトピックが寄せられました。

- 外国のFDでは、SNACKSとかCOFFEE/TEA等出してきて、もう少し自由に話す時間もありませんので是非。
- 他大学のFDの状況。
- もっと京大の教育の現状を知りたかった。
- 教育支援の内容をもう少し詳しく知りたい。
- 教育支援(センターwebサイトなど)の具体的な使い方など。
- 京大生らしい人材を育てるにはどうすべきか具体的に議論できる情報が欲しい。

③グループ別セッションで追加すると良いと思われるもの

留学生対応やICT活用の実際など多様なニーズが寄せられました。

- 京大の将来像と教育の仕方の関係などを考えるセッションがあっても良い。
- 留学生の対応を含める。
- 学生を博士に進学させるには。
- プレゼンテーション資料の作り方: デザイン的な見やすさ、読みやすさ。
- ICTを使って実際に授業を作る。
- ICTのコナーでは、もう少し汎用性のあるテーマが含まれると良いかと思いました。
- 反転授業。
- アクティブラーニングの具体的なデザイン方法について。

④本セミナーの改善すべき点

最も多く出た意見として、インテグレーションセッションの時間が少なくもっと欲しかったといったものでした。一昨年の倍(20分→40分)にしたにも関わらず、まだまだ議論したいというご意見をいただきました。

- レクチャーを少なくして、グループ別セッションを増やす。
- グループ別セッション、2つ参加でも良いかもしれない。
- セッション1～4が長いです。1つ～2つけずとも良いのでは。

- セミナーが長時間に及ぶ点。セッション1～4については事前に資料、動画等を配布し、30分程度に短縮しても良いと感じました。
- 長さ(時間)、内容ともに良かった。セッション5の内容をもう少し充実して欲しい。テーマ自体は良いと思うが、内容があまり深くなく、表面的、一般的なディスカッションだった。
- セッション6はもう少し長くてよい。MCグループは、1、3(セッション5)しか参加者がいなかったのが残念。
- 最後のインテグレーションセッションは、もっと時間を取っても良いと思います。
- インテグレーションセッションの時間がもう少し欲しかったです。
- 参加者同士のコミュニケーションを取れる時間を増やすと良い。

⑤本セミナーに参加して良かった点

たくさんの感想をいただきました。全て掲載できませんが、他分野の先生方と話せたりつながりができたことを良かったと感じておられる先生が多かったです。教育に対して自信がついたり、意欲が上がったといった声も聞かせていただきました。

- 京都大学として教育にかける情熱が伝わって来ました。教員としての自覚を促されました。
- 自分一人では思いつかない様な授業の進め方が紹介されたので参考になった。新任教員だけではなく、少し経験を重ねた人にも参考になると思った。
- 実際に講義に活用できるノウハウ(アイスブレイクの手法や情報の発信側、受信側の違いを知ることのできるワーク)について知ることができた点。
- 他の研究分野の研究者と知り合うことができた。現在の大学をめぐる教育・研究の問題点を知ることができた。
- FDの機会がなかなか無く、すべての情報、また討論、交流が有益であった。
- 皆さんエネルギーで、刺激を受けた。

こうした意見を参考に、今後もよりよいプログラムになるよう改善していきたいと思います。

(山田 剛史)

4. プレFD

「プレFD」とは、これから大学教員になるうとする大学院生やオーバードクター(OD)・ポスドク(PD)のための職能開発活動の総称です。ここでは、本センターが支援する、3つのプレFDの取組についてご紹介いたします。

(1) 文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科とFD研究検討委員会が共同で主催する、文学研究科のODによるリレー講義形式のゼミナールで、2009年度から実施されています。

本プロジェクトは、年度はじめの事前研修会、各ODを講師とする2～5回の公開授業、他の講師およびコーディネーターを交えた授業ごとの検討会、そして年度末の事後研修会により構成されます。所定の条件を満たした講師には、京都大学総長よりプロジェクトの修了証が授与され、すでに約140名が修了証を得ています。

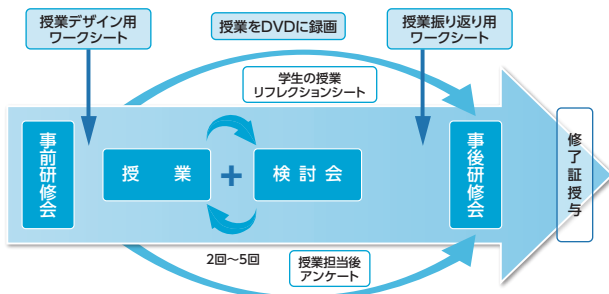
2017年度は、文学研究科よりコーディネーター4名、教務補佐員3名、講師20名が参加し、本センターより3名がこれをバックアップする形で、行動・環境文化学系、哲学基礎文化学系と基礎現代文化学系の3つのリレー講義が展開されました。

本授業は、公開授業となっており、学内教職員の参観は随時可能です。日程などの詳細は、以下のHPをご覧ください。

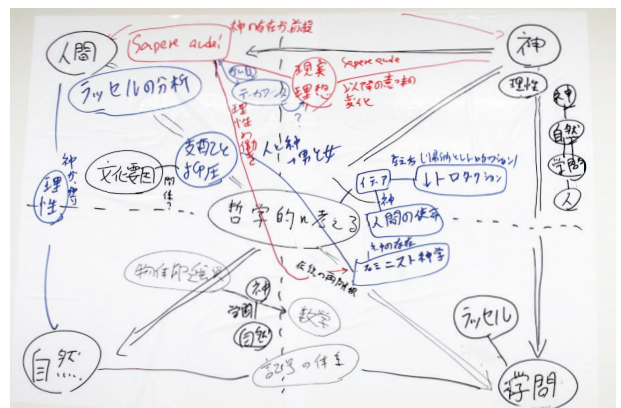
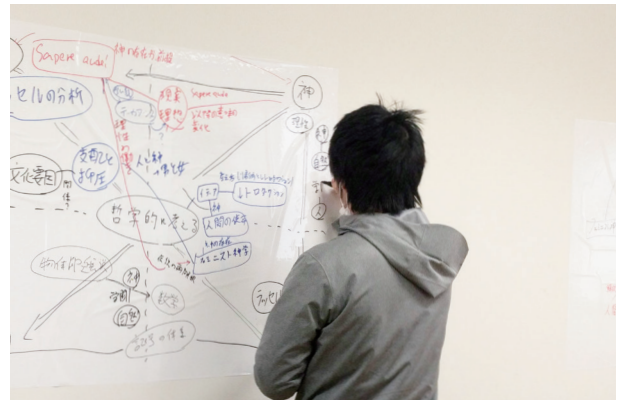
● 文学研究科プレFDプロジェクト

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/>

(田口 真奈・斎藤 有吾)



文学研究科プレFDプロジェクトの流れ



(2)大学コンソーシアム京都・単位互換リレー講義

2015年度より、プレFDプロジェクト修了後の発展的プログラムとして、大学コンソーシアム京都との連携のもと、文学研究科が提供する単位互換リレー講義「人文学入門」が開講されました。本授業は、京都大学文学研究科が初めてコンソーシアム京都に提供する単位互換授業で、京都駅近くのキャンパスプラザ京都にて実施されています。受講生は、京都大学の学生を含め、様々な大学から集まっています。本授業は、特色ある科目として、大学コンソーシアム京都により「プラザ推奨科目」に認定されています。

2017年度は「常識を疑う 日常に隠れたメディア・コミュニケーション」を全体テーマとして、コーディネーター1名と講師7名が、アクティブラーニング型の授業を展開しました。内容は、我々が普段、言語や身体など無数の「メディア(媒体)」を通して世界を認識していること、そして日常のありとあらゆる場面で「コミュニケーション(伝達機構)」が機能していることを、歴史学や哲学、心理学、言語学などの観点から広く学ぶものとなりました。

本プログラムでは、プレFD修了生が協力し合い、個々の担当授業だけでなく、半期15回の講義全体をデザインするという経験を積むことに主眼がおかれているため、プロジェクトは開講の1年前にスタートします。そこで、各自の担当授業と、全体目標とのすりあわせを行いながら、シラバス作成を行います。また、開講直前には、それぞれが「授業デザインワークシート」を持ち寄り、全体の到達目標を見据えて、各自の授業目標を確認、そのための具体的な授業デザインを検討し合います。

若手講師がそれぞれ創意工夫を凝らし、アクティブラーニングを取り入れた授業形式にも積極的に挑戦する本授業は、受講生から多くの肯定的評価を得ています。2017年度を受講生に授業に対する満足度を5件法(1: まったく満足していない ~ 5: 非常に満足している)で評価したところ、全体平均4.00点でポジティブな評価を得ました。また自由記述では、「授業ではなくゼミに近い形で良かった。親身さを感じた」「今まで感じる事のなかったメディアと付き合うことによって、違った視線で生活を送ることができた」などの感想をいただき、プレFD修了生たちの授業が内容・形式ともに魅力的なものとなっていることがうかがえます。

●文学部単位互換リレー講義「人文学入門」

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/consortium/>

(田口 真奈・斎藤 有吾)



(3) 大学院生のための教育実践講座

本講座は、京都大学FD研究検討委員会が主催、本センターが共催し、将来、大学教育に携わりたいことを希望する京都大学の大学院生(PD・研修員などを含む)のために、ファカルティ(大学教員)へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。今回で13回目となります。2017年度は、8月22日に、百周年時計台記念館2階で開催されました。様々な専門分野から29名が受講し、大学教育の現状をおさえるための基本的な講義、それをもとに授業実践について多様な観点から検討するためのジグソー法を取り入れたグループワーク、劇団の方をお招きしてコミュニケーションデザインを学ぶボディワークまで、とても豊富な内容で、受講生それぞれが「大学でどう教えるか?」に対する考えを深めながら、大学院生同士のネットワークを広げました。加えて、全てのプログラムに参加した受講生には総長名の修了証が授与されました。

研修会直後にアンケートを実施し、プログラム全体に対する

満足度を5件法(1:まったく満足していない~ 5:非常に満足している)で受講生に評価していただいたところ、満足度の平均4.8点と、非常に満足していただけたことがうかがえます。また、このような講座に対してどう思うかに関する自由記述では、「私の場合、現段階では大学教員を志すか迷っているので、本講座を通して実際に大学教育に携わるとはどのようなことなのか、ということに関して具体的なビジョンを描くことができ、進路決めの有用な判断材料となりました」など、このような講座の必要性を改めて感じるお声をいただきました。

● 大学院生のための教育実践講座

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/study/index.html>

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/kouza2017.php>

(松下 佳代・斎藤 有吾)

プログラム	
10:00~	開会式 挨拶：北野 正雄 京都大学理事・副学長
10:20~	セッション 1 ミニ講義 1 「大学を取り巻く状況と多様な授業実践」： 松下 佳代 京都大学高等教育研究開発推進センター教授
10:45~	セッション 2 グループ討論 1： 「アクティブラーニング」「ICT 活用」「多様性」「協働・協調学習」の 4つの部会に分かれて議論
11:45~	セッション 3 ランチと自由討論
13:00~	セッション 4 コミュニケーションデザイン「演劇でコミュニケーションデザイン」： 運行 劇団衛星主宰
14:20~	セッション 5 ミニ講義 2 「後輩たちに伝えたい大学教員になる前の準備あれこれ」： 田中 一孝 桜美林大学リベラルアーツ学群専任講師
15:05~	セッション 6 グループ討論 2： ジグソー法により他の部会から得た意見やこれまでの講義の知見をもとに、 部会別にさらに深く議論
16:05~	グループ討論整理
16:40~	セッション 7 全体討論： 各部会 8 分の発表と 5 分程度の質疑が行われ、活発な議論を展開
17:40~	ラップアップ
17:55~	閉会式 挨拶・修了証授与： 飯吉 透 京都大学 FD 研究検討委員会委員長・京都大学高等教育研究開発推進センター長 閉会式終了後 情報交換会 (~18:30)



(4) 研究科横断型教育プログラム「大学で教えるということ」

京都大学では、所属研究科の高度な専門教育に加えて、研究科を横断する教育プログラム(研究科横断型教育プログラム)を2009年度から実施しています(詳細は、ウェブサイトにて <http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/curriculum/graduate/cross>)。

その中の「マネジメント・キャリア・研究者倫理科目群」として、将来教育職に就くことを希望する大学院生向けの科目「大学で教えるということ」(後期集中講義)を提供しています。「大学院生のための教育実践講座」(p.12参照)は、講義とディスカッションが主体の入門的な内容になりますが、本授業は実際の授業をデザインし、模擬授業やピアレビューを行うなど、実際に授業を実践するうえでの基礎となるスキルの育成を含めた応用的な位置づけになっています。本授業の到達目標は以下の通りです。

- (1) 大学教育の現状を知り、理解すること
- (2) 授業デザインに関する基本的な知識を知り、理解すること
- (3) 効果的な授業デザイン(到達目標・評価方法)を作成すること
- (4) 多様な授業方法を知り、活用方法を計画すること
- (5) 模擬授業・検討会を通じて、授業実践の技能を磨くこと
- (6) グループでの協同作業に積極的に関わること
- (7) 自身が大学で教えることに関する広い視野と具体的なイメージを持つこと

2017年度は2018年2月8日・9日・13日の3日間で実施されました。受講生は10名で、修士課程から博士後期課程まで幅広い大学院生が受講しました(教育学研究科4名、人間・環境学研究科3名、地球環境学舎2名、アジア・アフリカ地域研究科1名)。専門分野の異なるチーム(3チーム)で授業をデザインし、模擬授業を行いました。

終了後のアンケート(10名中10名が回答)では、「学生自身に考えさせる工夫がされていた(平均3.9)」「講義中に学生の質問・発言等を促してくれた(3.9)」「授業内容は(研究科・文理・分野を)横断するものであった(3.7)」「自分の専攻分野にとって重要な内容だった(3.8)」「自分の将来の進路に役立つ内容だった(3.8)」「この講義の関連分野に興味や関心が深まった(3.8)」「総合的に、自分にとって意味のある講義だった(3.8)」「いずれも4段階評定)など高い評価が得られました。

自由記述からは、「他の専門の方のお話は面白く、それと自分の専門の接点が見出せた時、全員がく同じ一つの現実>を扱っている気がして、知的な興奮がありました」「フィールドの違う人と、その場だけでなく、3日間通して一つのことをするのは刺激的でした」「大学の授業について体系的に学ぶことができた」「学際



的な授業をどう組み立てていくことができるか、協働で授業を組み立てる経験ができたことは必ず今後活かせると感じた」「大学院生や研究員などが受講すべき内容がつまっていた。もっと広く周知してもよいと思う」「とても有意義な授業だったので、オススメしていきたいです!」など、様々な声が聞かれました。

(山田 剛史)

5. 他部局との連携

(1) 宇宙総合学研究ユニットとの連携

① 有人宇宙教育プログラムへの協力

京都大学学際融合教育研究推進センター宇宙総合学研究ユニットでは、宇宙飛行士の土井隆雄特定教授を中心として、「有人宇宙活動のための総合科学教育プログラムの開発と実践」(文部科学省宇宙航空科学技術推進委託費、2016～2018年度)の取組が進められています。このプログラムの目的は、宇宙に関わる高い専門性を持つ次世代人材の育成と潜在的な宇宙利用の拡大の両面に貢献することであり、全学共通科目「宇宙総合学」、ILASセミナー「有人宇宙学実習」、研究科横断型教育プログラム「有人宇宙学」が開講されています。

本センターは、この教育プログラムのカリキュラムや評価のデザインに協力しています。宇宙総合学については、授業評価として学生に対するフォーカスグループインタビューの実施、有人宇宙学については、学習活動・学習評価として「有人宇宙活動」をキーコンセプトとするコンセプトマップの作成(事前・事後)などを提案・支援しています。

② パラボリックフライト事業への協力

宇宙総合学研究ユニット、霊長類研究所などとの連携による「パラボリックフライトを用いた微小重力下における社会的認知・認知進化に関する研究教育活動」(2017年度総長裁量経費)にも参加しています。パラボリックフライトとは、航空機を放物線状に飛行させることで微小重力を体験できるもので、このような重力環境の変化が、時空間認知能力、社会心理(利他性など)、宇宙観・宇宙への関心などにどんな影響を与えるかを研究しています。

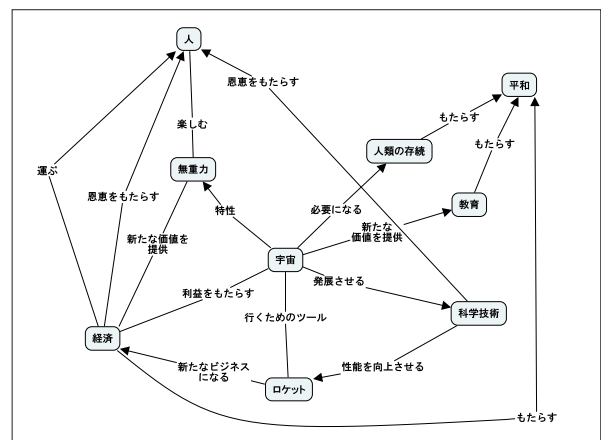
2017年10月28日、12月16日に、パラボリックフライトが行われ、学生10名が搭乗しました。本センターでは、宇宙観・宇宙への関心などの変化について、①「宇宙」をキーコンセプトとしたコンセプトマップの作成、②身体感覚受容感尺度(PABS)の質問紙、③有人宇宙活動に関する認識の変化に関する自由記述、の3つの調査を実施しました。

本事業の成果報告は、2月10日・11日に開催された第11回宇宙ユニットシンポジウム「人類は宇宙人になれるか?—宇宙教育を通じた挑戦—」において行われました。

(田口 真奈・松下 佳代)



パラボリックフライトの様子



コンセプトマップ(パラボリックフライト後)

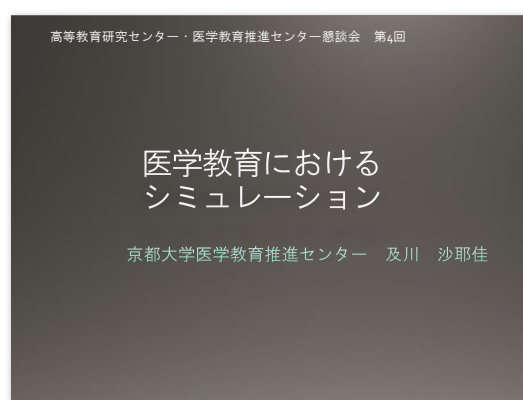
(2) 医学教育・国際化推進センターとの連携

① 情報交換を目的とした緩やかな連携

医学教育の推進に特化した医学教育・国際化推進センターと、特定の分野に限定しない形で教育改善支援を行う本センターとが、お互い持つ知識やリソースを提供・共有できるような懇談の場を設けて、様々な話題について情報交換（懇談会）を行っています。できる限り負担をかけないよう、昼食時間を利用したり、開催頻度も不定期にしたりと、緩やかに長く続く関係を構築しています。2017年度は、懇談会を契機に、個別のテーマについて更に踏み込んだ連携の在り方について議論を行っています。本センターでは、組織間の制度的な連携のみならず、こうした緩やかな情報交換を目的とした連携も積極的に進めていければと考えています。



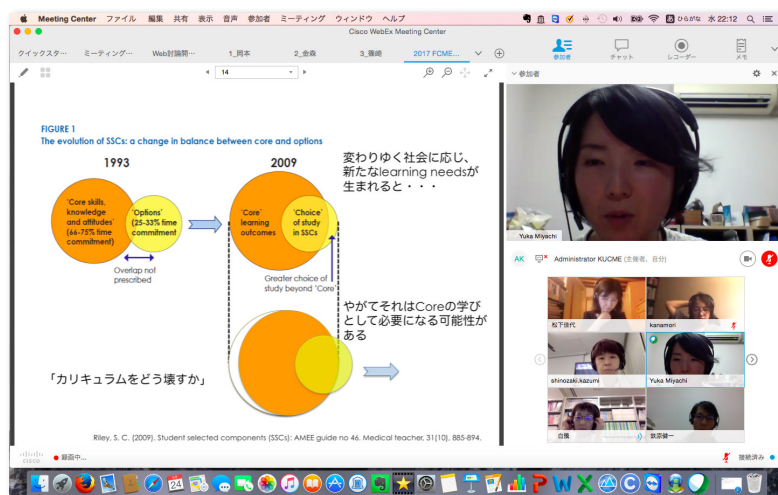
高等教育研究開発推進センターからの話題提供



医学教育・国際化推進センター(旧医学教育推進センター)からの話題提供

② FCMEへの協力

医学教育・国際化推進センターでは、2016年度から、文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラムとして「現場で働く指導医のための医学教育学プログラム(FCME)」(<http://cme.med.kyoto-u.ac.jp/fcme/index.html>)を提供しています。このプログラムは、学生や研修医に対して指導経験のある医師を対象にしたもので、医学教育学全般の知識を習得することで、自身や自施設の教育活動を省察し、改善できるようにすることを目標としています。毎年、全国から10名程度の医師が参加し、年3回の参加体験型学習、および月2回のWeb討論型学習を通して1年間学びます。「医療・教育を『社会的共通基本』として捉え、暴走する新自由主義と正当に対峙する」など明確でユニークな思想・哲学をもち、医学教育学の理論にもとづく最新の内容・方法を具体化したプログラムです。本センターからは、必修科目の1つである「カリキュラム開発:カリキュラムを創る・壊すー自由な学びの場の構築」に、講師の一人として参加しています。



Web討論型授業の1コマ

「医療・教育を『社会的共通基本』として捉え、暴走する新自由主義と正当に対峙する」など明確でユニークな思想・哲学をもち、医学教育学の理論にもとづく最新の内容・方法を具体化したプログラムです。本センターからは、必修科目の1つである「カリキュラム開発:カリキュラムを創る・壊すー自由な学びの場の構築」に、講師の一人として参加しています。

(松下 佳代・山田 剛史)